

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果

共通テスト第4回である令和6年度の問題の種類と各解答数、配点の内訳を【表1】に示す。200点満点は令和5年度問題と変わらない。全体の解答数についても令和5年度と同じく50とした。第1問は発音問題であるが、Dに関しては、ピンインによる出題をリスニング問題の代替とする観点に基づき、ピンインによる会話問題を出題している。第2問は、語彙の適切な使い方を問う問題で、令和5年度問題と同様である。第3問も、令和5年度問題と同様の形式である。第4問は、共通テスト第1回から特に充実させた形式で、コミュニケーション能力を読み取り測定する問題である。中間Aでは、会話・グラフ・レポートから情報を読み取った上で適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の受信力を測定できる問題とした。中間Bでは、会話・報告書から情報を読み取り、それらを総合して発信することを想定して、適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の発信力を測定できる問題とした。第5問は長文問題で、長文読解力全般を測る問題としている。

【表1】

問題の種類	発音・ピンイン	語句	表現理解力	コミュニケーション能力	長文読解
問題番号	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問
解答数	9	8	10	12	11
配点	36点	32点	28点	52点	52点

第1問：発音の基礎及び正確さを確認する問題、正確なピンイン把握によるコミュニケーション能力を確認する問題である。

音節の3つの要素（声母、韻母、声調）について問う出題及び正確なピンインの把握によるコミュニケーション能力を問う出題となっている。中間AからDにわたって、日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮し、基本的な単語から出題した。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは、提示されている語がみな重要語であり、適切であるとの評価を得た。

Dについては昨年と同様、会話文、選択肢をピンインで出題した。中国語表記の補助手段としてピンインによる表記法を用いることは、中国語の4技能をバランスよく習得するために必要な手段であり、日本の高等学校における中国語教育では極めて重要である。教科担当教員からは、会話文、選択肢共に難解な語句はなく、ピンイン学習を重視する出題であるとして、

評価を受けている。

A：声母に関する知識を問うもので、**1**は“l”と“r”の区別、**2**は卷舌音かつ有気音の“ch”と卷舌音かつ無気音“zh”や、舌歯音、舌面音などとの区別を問うもので、正確な発音の習得と知識が求められる。

B：韻母に関する知識を問うもので、**3**は“ü”の音、**4**は“eng”と“ong”と“en”の区別を問うた。

C：声調に関する知識を問う問題で、問1では二音節語、問2では三音節語における声調の組合せを問うており、4つの二音節語と4つの三音節語、すなわち20の音節に関して正確に把握していなければ正解は導けない。中国語を学ぶ初学者にとっては習得に苦勞するポイントであると同時に、相当中国語に習熟した者でも正確な知識を欠くことがある。

D：ピンインの会話文によるコミュニケーション能力を問う問題で、会話の流れを理解して解答する必要がある。

第2問：語彙力・表現力を測る問題である。

Aは文の一部を空欄とし、適切な語を選ばせる問題で、単語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。併せて類義語の区別も問うた。教科担当教員からは、類義語の知識が要求され、選択肢も重要語であり、ほぼ適切な問題であるとの評価を受けた。

BはAと同様に、語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。適当でないものを選ばせることで難易度を上げている。教科担当教員からは、選択肢はいずれも難解な語ではなく重要語であるが、問1は語の用法を問うものとしてはやや難解と思われる、という指摘を受けた。

Cは、100～120字ほどの短文を読み、文脈に従って適切な語を選択させることによって、文脈に応じた語彙を選択する力を確認するものである。教科担当教員からは、文章理解や文脈を複合的に考えさせる良問であるとの評価を受けた。

第3問：作文能力及びコミュニケーション能力を測る問題である。

和文中訳及び中文和訳を通して、中国語の表現力、理解力を測る問題である。

A：日本語の文を読み、与えられた語句を正しく並べて対応する中国語の文を作る、和文中訳の設問である。8つの選択肢から必要な4つを選ぶ。教科担当教員からは、選択肢の語句はいずれも重要語の範囲で、語句の用法や文法の理解を確認する適切な問題であるとの評価を得た。

B：和文中訳問題で、選択肢の中国語はピンインで表記してあり、日本語の日常的な表現に対応する中国語の運用能力を測ろうとするものである。問1、問2共に日本語の表現を的確に理解した上で、ピンインで示された中国語の選択肢の全てを、それぞれ最後まで読み解かなければ正解が導けないように工夫した。教科担当教員からは、基本的な文型の理解を問う良問である、というコメントを受けた。

C：中文和訳で、問題文の中国語はピンインで表記してある。選択肢の日本語文を最後まで読み解かなければ正解できないように工夫した点は、上記Bと同様である。教科担当教員からは、選択肢の難易度も含め良問であるとの評価を得た。

第4問：大学の観光研究会居住地域の観光について調査を行うなどの、地域探求に関わるサークル活動におけるコミュニケーションの場を具体的に設定して、身近な話題に関する資料から必要な情報を読み取り、複数の情報を比較・判断して要点をつかむ力を問う問題である。言語情報处理的観点から必要な内容を整理・統合して正しい解答を得るようにしてい

る。中間Aでは情報を受信する場面における中国語運用能力、中間Bでは情報を発信する場面における中国語運用能力を問う。

現実の生活に即した素材からの出題であるため、従来出題には使われなかった語彙もこの第4問に限り取り入れている。ただし、受験者にとって難度が高い語彙は避け、正答を導くのに必要な情報は適切な語彙レベルを維持するよう配慮した。また、表などを使って情報をスムーズに伝える工夫をしており、ここでそれらを用いるのは、そのような現実の生活の面における中国語の運用能力を問うことを主眼とするためである。

Aは高等学校の観光研究会のメンバーがT市の観光について調査し、問題改善を試みるという設定になっている。地域の観光に関するグラフと会話、まとめの文章などから適切な情報を受信する能力を測る問題である。問1は、会話文から、ポイントとなる内容を的確につかみ、一致するものを選ぶ問題である。問2は、会話文から得られた情報に基づいたグラフを読み解く問題である。問3は、市内の外国語表記に関する調査結果をまとめた文章の要点を読み取る問題である。複数の言語素材から様々な形式の情報を得て、それら进行处理し、適切な解答にたどり着く能力を測っている。教科担当教員からは、地域探究は高校生にとってもなじみのある題材であり、語句・文型なども適切なレベルであるとの評価を得た。

Bは、Aと同様の設定であり、Aにおける調査にもとづいた議論を行う会話文や留学生の意見から適切な情報を受信した上で、それらの情報に基づいて作成された活動報告書の内容を問う問題である。問1は、会話文の空欄に入れる文を選択する問題と会話の内容と一致するものを選ぶという問題である。問2は、留学生たちが出した意見の中に空欄を設け、そこに入らない選択肢を選ばせる問題である。問3は、一連の活動報告書を読み解き、最終的に採用されたステッカーを選ばせる問題である。

教科担当教員からは、社会の現実的な問題と関わる内容であり、よく練られた良問であるとの評価を受けた一方で、語句として難解なものは使用されていないが、思考力を問う問題であり、問2に関しては問題全体の量とバランスを考える必要があるという指摘を受けた。

第5問：長文読解力を測ることを主たるねらいとしている。

今年度は論説文から選んだ。長文の分量は、長文問題としての適切な情報量に考慮して、昨年度共通テストの第5問と同じく900字強である。問題文は、使用語句、表現などにも留意しながら、共通テストにふさわしい内容に書き換えている。素材や書換えなどについても、教科担当教員から毎年提出されている要望を反映するよう努めている。

問題文は、スマートフォン利用の功罪に関する内容である。全般的には、夜遅くまでスマートフォンを使用することで起こる睡眠の質の悪化について説明した上で、スマートフォンは教育機会の平等化や災害時の情報収集など、高い利便性も有することから、理性的な利用が重要であることを説く内容の読解問題である。問1、問5、問6は空欄に入れるのに最も適する語句を選ぶ問題である。問2、問3、問4、問7は下線部の表す意味や内容を選ぶものであり、問8は下線部の意味として適当でないものを選ぶものである。問9は文脈から判断して空欄に入れるのに適切な語句の組合せを選ぶものである。問10は、従来どおり、問題文全体の内容に合致する選択肢を選ぶ問題であった。

教科担当教員からは、全体として適切な問題であるとの評価を得た。

3 ま と め

中国語は他の外国語と比べ平均点が高く、今回は特に本試験の中央値が179点であったことは大きな懸念材料として挙げざるを得ない。ただ、中国語の受験者層の特性を考慮すれば、いたずらに平均点に惑わされることなく、高等学校の学習で到達した学力を正しく評価できる試験であるべきと思われる。教科担当教員からも、高等学校からの学習者が対応できるような出題を強く要望されている。本部会の問題作成の方向性が平均点によって揺らぐことは、学習者にとって望ましくないと思われる。一方で、正答率の特に高い問題と低い問題をそれぞれ分析することによって、語彙レベルや文章題の難易度をそれほど大きく変えることなく、母語話者が多いという中国語受験者の特性に対応しつつ、高等学校における学習者が報われるような問題の作問には、まだ工夫の余地があるように思われる。

今年度の受験者は合計784人であった。これは、昨年の741人から43人の増加である。昨年の増加数には及ばないが、今後も受験数は増加していくことが予測される。来年度以降も、共通テストの目的に則して、基礎的な学力を身に付けた受験者が報われるような問題作成を心がけていきたい。

共通テスト4回目の結果として見た場合、語学の本来の意義である読解力の測定に加え、リスニングの課せられない外国語として、より効果的なコミュニケーション能力の測定方法を更に探求し、高等学校における言語教育及び言語活動の充実に応えられるよう努めたい。

今年度も教科担当教員の方々を始め各方面から有益な意見を頂いたことに、深く感謝したい。

こうした意見を参考にしながら、「高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる問題」の作成を通じて中国語教育の発展と充実に寄与していく所存である。